

青年と班別に分かれ、「私たちがつくる日韓交流プログラム」をテーマに話し合うこととなった。まず初めに韓国について連想されるもの、その次に日本について連想されるものを書き出した。韓国については、日本青年から多くの意見が出たが、日本については、日本青年からはぼつぼつと出る程度で、その光景を見て、灯台下暗しというように、自国については分かっているようで分かっていないことを痛感した。反対に韓国青年からは日本について多くの意見が出され、その度日本は魅力的な国なのだと改めて感じられたので、今一度日本の魅力に焦点を当てて考え、日本について聞かれたときに胸を張って答えられるようになりたいと思った。

韓国と日本について連想されるものを書き出した後、具体的に日韓交流プログラムの案を出し合い、私たちの班ではお互いの国の方言に触れるプログラムや伝統料理教室等様々なアイデアが飛び交い、日韓関係の明るい未来を想像しながら話し合うことができた。短い時間ではあったが韓国青年と考えを共有することができ、良い経験となった。

二つ目はホームステイである。

私達のホストファミリーは、子供が結婚し家を出ており、お父さんは出張で不在にしていたので、お母さん一人だけであったが、クラシックのコンサート、漢江、市場、家の近くで開催されていたお祭り等様々なところに連れて行ってもらう、すごく充実した日々を過ごすことができた。私はお母さんと共に過ごす中であることに気がついた。道が分からなくなった時、その場にいた見ず知らずの人に尋ねたり、コンサートの時、隣の知らない人に話し掛けて一緒に楽しんだり、他人と知り合いのように接することである。その光景は日本ではあまり見られないもので、これが韓国特有の情に溢れた日常なのだを知ることができた。また、その情を間近で感じることができ、嬉しかった。

ホームステイの夜、皆でテレビを見ていた時、お母さんが話をしようと言った。現在の日韓関係やお互いの国について、人について、どう思っているかなど正直に話し合い、やはり報道されていることが全てではないことを知った。韓国についてあまり知らない人達は、報道されている情報だけで韓国が嫌いだと言う。私はそうした誤解から生まれる溝を埋めていくために何ができるかを考え、行動に移していきたい。

単なる観光では経験することができない貴重な経験をさせてくれたお母さんに感謝するとともに、出会えた縁を大切にしていきたいと思う。

本事業で得たもの

私は今まで前に出るタイプではなく、人前で話すこ

とが苦手であったが、本事業をきっかけに変わりたいと思い、アシスタントユースリーダー（以下、「AYL」という）に立候補した。AYLの役割は団長らと団員間の連絡、各係のフォローや総括、ミーティングでの進行などであった。今まで苦手意識があり避けてきた役割ばかりであったが、団員皆の協力のおかげで無事やり遂げることが出来た。AYLを経験したことで、人前で発言する力や、自分の役割は何かを考え行動する力を得ることができ、大きく成長することができた。今後の社会生活においても、自分の役割は何か、自分にできることは何かを常に意識し行動していきたい。

また、本事業では楽しいことばかりでなく、派遣プログラムが急遽変更されたり、団内での連携がうまくいかない時期があったりと、大変なこともたくさんあったが、皆が団結することで解決していくことができた。長い間、苦楽を共にした団員は本事業で得た最高の仲間である。今後も多種多様な考えを持った団員達と交流を続けながら、視野を広げていきたい。

今後の活動について

私は本事業で、多くのことを学び、国際交流の素晴らしさを肌で感じる事ができた。この貴重な経験は、今後の私の人生にとってかけがえのない財産となるだろう。私はこの素晴らしい経験を一人でも多くの人に知ってもらい、一人でも多くの人に経験してほしい。そのためにはまず、目前にある報告会や連絡会議に参加することから始めようと思う。その後もIYEOの活動に積極的に参加し、様々な人に国際交流に興味を持ってもらうきっかけづくりに携わっていきたい。

また、国際交流の素晴らしさを伝えていくことはもちろん、私自身、本事業を通じて広げた“わ”を絶やさず、これからも多くの刺激を受けながら成長し続けていきたい。

はじめに

私は大学に入学してから第二外国語として韓国語を勉強し始めた。もともと希望していた言語ではなかったのだが、勉強を進めていくうちに楽しくなり、韓国の歴史や文化にも興味を持つようになった。

この事業を知ったのは、大学1年次の春休み、実家に帰省中のときだった。新聞折込みの県民向け情報誌をなんとなく見ていたら見つけたのだ。大学2年次の夏休みは副専攻の関係で予定が合わないことが分かっていたため、令和元年度の派遣に応募することに決めた。

大学2年次以降は、授業や所属ゼミナールの選択、卒業論文の題材決め、自主的な活動にも韓国を関連させるようになっていた。留学生のサポート団体や留学生向け日本語授業のボランティアを通して韓国の学生と関わり、韓国により強い関心を抱いた。

韓国青年との交流

私には韓国人の友だちが何人かいる。韓国で出会った人もいれば日本で出会った人もいるが、彼らは共通して日本語が大変流暢だ。日本語能力試験N1を取得しているし、日本語の会話も問題なくできる。私と話すときは、いつも日本語を使っていた。

公式プログラムの中では、韓国の青年たちと3回交流する機会があった。その中でも私にとって最も思い出深い、全州青少年文化の家での交流会について詳しく紹介したい。

全州青少年文化の家での交流会には、全州の中学生と高校生が参加してくれていた。私が入っていたグループの韓国青年は、高校生の男の子たち4人だった。日本語を勉強したことがない人、日本人と初めて交流する人、友だちについてきただけという人もいた。日本語が分からない青年がほとんどだったため、韓国語で会話をした。

今までは相手の日本語能力に助けられてきたが、今回ばかりはそうはいかなかった。楽しく交流の時間を過ごすため、何か話そうと思いつくことを喋ってみた。私が韓国語で話しかけると、日本語を勉強したことがないと言っていた青年は少しほっとしたような表情を浮かべてくれた。青年は分かりやすく易しい言葉を使ってゆっくり話してくれた。そのおかげで、ほとんど理解できた。

青年は私が外国人であることを気遣い、私は知っている限りの韓国語を使ったことによって会話を続けら

れた。協力してコミュニケーションをとれたことが嬉しかった。そして、自分の韓国語能力をもっと高めたいと思った。

交流会では、韓国側が準備してくれたゲームも行った。ゲームを簡単に説明すると、グループで協力してひとつのミッションをクリアする、というような内容だった。そのゲームをやり終わった頃には、ふざけ合うこともできるようになっていた。

高校生の彼らからしたら、大学3年生で女性の私たちは、扱いづらい部分もあったと思う。しかし、彼らは私たちを丁寧にもてなしてくれた。グループのテーブルではお菓子を取ってくれたり、韓国伝統の灯籠「チョンサチョロン」作り際には汚れてしまっていた部品を自分のものと交換しようとしてくれたりした。大きなことではないのかもしれないが、このような優しさに触れ、私はとても嬉しく思った。

2019年の夏は戦後最悪の日韓関係と言われており、韓国に行くことも世間からは不安視されていた。実際に、親世代の知人男性に韓国に行くと伝えたら、酷い言葉が返ってきたこともある。

この派遣で深めた交流の数々は、韓国と関わっていきたいという思いを今一度強く持たせてくれた。

生活の中に溶け込めたホームステイ

私がホームステイした家庭は、70代のお母さんがひとりで暮らしている家だった。とても若々しい方で、70代には見えなかった。家は、高層マンションの一室だった。今まで風景の一部としてしか見ていなかった場所に入ることができ、それだけで少しくわくわくした。

お母さんは何度もホームステイを受け入れたことがある方で、非常に慣れていた。お母さんの言っていることは大体理解できた。簡単な日本語と英語が分かる方だったので、会話に困ることもなかった。日本語の語彙が多く、驚かされた。

漢江や市場など、いわゆる観光地にも連れて行ってくれたが、思い出深いのは家でのことやお母さんとの会話だ。私たちの団スローガンにもある「情」を感じたし、生活に溶け込めたように思う。

お母さんは2日目の夕食にチャプチェを作ってくれた。そのチャプチェを私たちに取り分けた後、別のお皿に入れてラップをかけていた。「警備のおじさんに持っていくのよ。料理をするのは好きだけど、ひとりで食べるのは寂しいでしょ」と教えてくれた。夕食を食べてか

ら、屋上の菜園を見に行っただ。大きなプランターがたくさん並べられていて、そこではサンチュや唐辛子などいかに韓国らしいものが育てられていた。ひととおり野菜の世話が終わったら、お母さんが毎朝運動している団地の公園に行っただ。散歩をしたり、近所の小学校で開催されていた音楽会を見に行ったりした。音楽会から帰宅してポストの中を見ると、きれいに洗われたチャプチェのお皿が入っていた。「いつもこうしてるのよ」と言っていた。こんな風に、日常の中で「情」を垣間見ることができて嬉しかった。

他にも嬉しかったことがある。お母さんが私たちに日韓の抱える問題について、話題を振ってくれたことだ。「私はホストマザーだから日本人が来ててもそういう話は避けてきた」と言っていたが、私たちが韓国人の気持ちや考え方を理解しようとしていると見込んで話してくれた。歴史だけでなく、靖国参拝や原発のことも話題に上がった。こうした話をしながらも和やかな時間を過ごせたことが嬉しかったし、このような内容を世代の違う人と話せたのも貴重だった。

別れる前に手紙を渡した。一緒にホームステイした団員と日本語で文章を考え、翻訳機を使いながら韓国語の文章にした。私が書いた韓国語の文章はいまひとつだったが、「よく書いたね」と喜んでくれた。「帰って家族と飲みなさい」と焼酎を2本持たせてくれた。

派遣団員との出会い

この事業について話す際に欠かせないのが派遣団員との出会いである。当初は、こんなにも団員を好きになるとは思っていなかったし、事業の記憶として大きく残ると思っていなかった。一部の団員とは出会っていた2次選考、みんなと顔を合わせた事前研修から派遣までを思い返し、濃密で特殊な時間を過ごしてきたと改めて感じている。

日韓青少年交流会でのディスカッション準備で、私のグループは調べを2週間に一度共有することになっていた。それぞれ忙しい中、丁寧に調べ、調べたものに対するフィードバックもお互いに怠らなかった。自主研修中にもコミュニケーションをとり続けていたし、真面目に取り組む姿を見てきた。グループメンバーのおかげで、達成感のあるディスカッションになった。

係は記録係をやっていた。仕事は実務的なことばかりで特に目立ったこともしないが、そういうことが性に合っていると思って選んだ。実際、係の仕事は地味で、時間や名刺の記録、報告書の作成などがメインだったが、とても楽しかった。同じ係だった団員と特に気が合ったのも要因のひとつである。私はしっかりしていないのだが「しっかりしている」と言われることもあり、嬉しかった。自分が集団の中のどこで、どのように過

すのが合っているのか、少しだけ分かったような気がする。今までいろいろな集団でいろいろな立場を経験してきたが、係の仕事を通してまたひとつ自分について分かった。

団員は、配慮ができ、優しく、面白く、尊敬できる人たちだった。そんな人たちに囲まれて過ごすことができ、本当に幸せだった。皆が皆、係の仕事を持ち、その他のことでも忙しく過ごしていた中で、お互いを気遣ってやさしい世界を形成していた。ホームステイで別れるときでさえ、寂しかった。各々が目標や意志を持っていて、輝いて見えた。これから団員たちがどんな風に過ごして行くのか、ぜひ見せてほしいし、これからも付き合い続けていきたいと思っている。みんなが書いてくれた寄せ書きは、私の宝物になった。思い出と、身に余る褒め言葉が詰まっている。元気がなくなったり、頑張れなくなってしまったりしたとき、また目を通したいと思う。

この事業は本当にたくさんの方々のご尽力で成り立っている。三役、センターの方々、韓国側のコーディネーターさん、通訳さん。文字数の関係で詳しく言及できないのが残念だが、本当に感謝している。

今後について

この事業のことを私個人のSNSに掲載したところ、友人や後輩が興味を持ち、「話を聞きたい」と言ってくれたり、質問をくれたりした。韓国派遣以外の事業に関心を持ってくれる人もいた。内閣府青年国際交流事業は大学生が参加しやすい事業だが、2月に詳細が発表され3月に締め切りがあることによって、応募時期を逃す人も多いと思う。私の大学にもポスターが貼ってあったが、春休み中はほとんどの学生が学校を訪れない。事後活動としては、この事業の存在を周知し、関心を持っている人や挑戦してみたいけれど内閣府と聞いただけで諦めそうになってしまう、かつての私のような人のために、内容や経験を様々な方法で発信していきたい。

私は大学4年次の1年間、韓国外国語大学に留学する。大学4年次での交換留学は1年次の頃から計画していたものだ。韓国に住むということは、より本格的に韓国と関わっていくことになる。大学に入って韓国語を選択するまでは、こんなにも興味をそられるとは想像もしていなかった。関心を持ってからの日は浅いが、今後深くかかわっていけるのが楽しみだ。

大学で韓国語を勉強したと言っても基礎のみで、以降は独学なこともあり、自分の韓国語能力に自信がない。この派遣での交流を通して、もっと韓国語を理解し、使えるようになりたいと思った。韓国語を使える団員や涉外さんたちがとてもかっこよく見えた。交流だけでなく、飲食店に行ったときや自由時間にもそう感じた。

もっと勉強をしたいし、本格的に習って使える環境に身を置けることも楽しみである。

この事業に参加できたことは、人生に影響を与えてくれたと言っても過言ではない。素晴らしい経験が日本の青年たちに開かれていることを、もっと広めたいと考えている。

初めての韓国訪問、忘れられない時間

はじめに

「隣の国を超えて世界はないよ、お隣の国の背後に世界があるんだよ」この言葉は、私が小さいころから家族と共に所属しているヒッポファミリークラブという国際交流団体の創始者である榎原さんのものだ。同団体の青少年交流に参加した中学一年生の時に、韓国人の女の子と出会ってからずっと、韓国は私にとって近い存在の国だ。文化や言語的に日本と似ている点も多く、歴史的なつながりも深い韓国に、とても興味があったが、私は今まで一度も現地へ行く機会がなかったため、生の韓国を知らずにいた。大学受験が終わり、次のチャレンジを探していた時にこの内閣府の派遣事業に出会い、すぐさま応募した。日韓関係の現状は難しいが、それでもお隣の国なのだから共に支えあってよい関係を築くに越したことはないはずだ。グローバル化が進む中、まず私たちは、一番近い国の韓国に目を向けて理解をしようと歩み寄り寄るべきである。国と国との関係は難しくとも、人々との関係から変えていけることは必ずあると思う。そんな草の根活動への参加意欲もあったため、国際理解の意味も込めて私はこの派遣に参加した。

在大韓民国日本国大使館公報文化院にて

私が派遣の中でとても印象に残っている訪問先の一つが、在大韓民国日本国大使館公報文化院である。副院長／一等書記官である宮田起三弘氏の講義を受けたが、日韓関係を私たちよりもずっと近いところで見て、韓国の人々と深いコミュニケーションをとられている方のお話は、ニュースやSNSよりもずっと現実味があって、勉強になった。日韓関係において重要となる安全保障や、経済、人的交流などの問題や、その問題に対する韓国の人々の姿勢、また「韓国の人々が日本以上に周りの空気を読む」というような国民性からの傾向について聞くことができた。懸念や課題が山積みの中、日韓をWin-Winの関係に導くためには何が必要なのかということをとて考えさせられた。「国際交流には常に相手がいて、その相手が自分と同じ背景や考え方を持っているとは限らない。だからこそ『違い』を『違い』として認め、自分の物差しで相手を判断してはいけない。相手の声に耳を傾け、それと同時に自分のこともしっかりと伝える双方向の交流を心がけることが大切だ。交流をしてこそ自国のことも知ることができる、自国について正しく知ることこそまずは大切なことだ。」などと宮田副院長は多く

の言葉を残してくださったが、特に私が印象に残っているのは「国際関係・外交では100%の勝利はない」というものだ。国際関係が悪化すると、メディアなどで特にどちらが悪い、条約を結べた、経済力がある、力があるから勝ちだ、などと関係を善悪で判断してしまうことがあるかもしれない。しかし実際に考えてみて、違う文化を持った国々が簡単に分かり合い、理解することの方が難しいことだろう。お互いが少しずつ妥協して、協力することでようやく友好的な関係を築けるのだと思う。また、「文化交流は日韓関係のトーンを良くし得る」とも宮田副院長は述べていた。その言葉通り、在大韓民国日本国大使館公報文化院では様々な文化行事も開催していた。私には小さい頃から国際的に働きたいという夢があるが、実際に宮田副院長のお話を聞いて、質問もできたため、自分の将来についてこれからより深く考えてみようと思った。外交官になる、NGOなどの団体に所属するなど、一概に国際的に働くと言ってもたくさんの選択肢があるが、自分自身の価値観がどこにあるのか常に考えて、そのために勉強していきたい。

日韓青少年交流会に参加して

一泊二日の交流会の中で一番記憶に残っているのは、自主研修期間中から準備してきた、班ごとのディスカッションだ。全体の「多文化共生」というテーマのもと、私のチームはメディアに焦点を当てた。そして、新聞やニュースなどのメディアの偏向報道が及ぼす影響について取り上げ、竹島問題と日本製品不買運動を中心に情報を集めた。日韓関係は、事前研修から韓国派遣までの間で大きな動きを見せたため、私は準備として地方紙と全国紙の韓国についての記事やコラムをスクラップしてノートにまとめていたが、それらは毎日様々な情報で溢れていた。日韓関係が悪化してしまった背景には歴史問題がある。しかし私たちの世代は、戦争や辛いことを実際に体験していない。そのため、メディアから多くの情報を受け取る。メディアはとても便利なツールだが、そこにある情報が常に正しく客観的であるとは限らない。知識が不十分で選別ができず、過激的な報道を信じてしまったり、感情が込められて書かれた文章から誤解を招いてしまったりすることがある。韓国の学生とディスカッションをする中で、「日・韓のメディアの現状」や「私たちが考える偏向報道とは何か」、「私たちは偏向報道とどう向き合うべきなのか」などの大きく3つのテーマで意見を出し合った。私は日本での事前研修中に、同

じグループのメンバーと情報の共有や、議論のために定期的に通話をしていたし、毎日欠かさず新聞を読んでニュースにも目を通して、その都度自分はどうか考えるのか自分の意見を考えたりもしていたので、自分では準備をかなりしたつもりではいたのだが、実際ディスカッションになって韓国の学生の前で、日本人として発言することには物凄く勇気が必要だった。自分の発言が、日本人学生の発言と取られる責任の重さを感じ、自分の意見を伝えることがとても大変だった。口に出せばすぐに伝わってしまう距離に韓国の学生がいるため、言葉選びが難しく、伝えたいことがあっても発言前に躊躇し悩んだ。自分の力不足に不甲斐なささえ感じた。外国人の友達と話す機会は以前からも多々あったものの、ここまでの責任や緊張感を感じることは初めてだった。今回のディスカッションで韓国の学生の生の声を聴くことができた。相手の感じていることを知れたために、浮かび上がった自分自身や自国の問題にも向き合うことができた貴重な機会だった。多文化共生の一步としてのメディアリテラシーが、いかに大切であるかも改めて再確認できた。

ホームステイでの出会い

二泊三日のホームステイは私にとって、本当に楽しく充実した思い出だ。私のホストマザーは通訳としてのキャリアがある方だったため、日本語での会話も可能だったが、韓国語を常に使うことを心掛けた。小学生の二人のホストブラザーたちと遊んだり、おつかいに行ったり、たくさん会話を楽しんだりできた。私はとても気になっていたので、「日韓関係が良くない中、どうして私たちのことを受け入れてくれたのか」と質問した。そうしたらホストマザーは、小学五年生の長男が最近学校で歴史を学び始めて、十分な知識がない状態であるのにも拘らず「日本は嫌いだ、日本は悪い」と口にしたことがあったと話してくれた。そのため、今回日本人の学生を受け入れて、実際に日本人と関わることで彼の中で日本に対する考え方が変わって欲しいと言っていた。人と人のつながりは国を超えるものだと私は思う。短い時間ではあったが、共に過ごすことで少しずつお互いを理解できた。彼の日本に対する考え方に、私の存在がどこまで影響を与えられたかどうかは分からないが、彼が楽しかったと別れ際に言ってくれたその一言が、とても嬉しかったのを覚えている。日本国内にいれば自分が日本人だと感じる機会はあまりない。しかし一步外に出れば現地の人にとって、私の振る舞いは日本人の振る舞いになり、私の印象が日本人の印象になる。それは良いほうにも悪いほうにもなり得る。その責任感を常に忘れてはいけないと感じた。

終わりに

春の応募・選考、夏の事前研修を経て、この秋の韓国での体験は本当に素晴らしいものだった。国の代表として訪問したため、観光客ではない視点から韓国を見ることができて、とても充実していた時間だったと思う。韓国での出会いが自分に大きな影響を与えてくれたのは勿論のこと、この派遣事業を通して出会えた仲間たちの存在は、私にとって本当にかけがえのないものだ。チームの中で最年少だった私は、時に自分の知識や経験不足を痛感したこともあったが、それ以上に周りの団員の学ぶ姿勢や行動力に刺激を受けた。自分自身のアイデンティティについても考えることのできたこの派遣で、私自身いくらか成長することができたと思う。韓国派遣に参加することは私にとって大きなチャレンジであったが、参加してよかったと心から思っている。これから自分の夢に向かって、広い視野を持ち、努力を怠らず、楽しんで勉強していきたいと思う。

ディスカッション成果

令和元年度 日本青年韓国派遣

ディスカッションの概要

日 時	9月21日(土) 9:00~15:40
場 所	ソウル — ハイソウルユースホテル
プログラム名	日韓青少年交流会
テ ー マ	【多文化共生】 <教 育> 在留外国人児童に対する教育について ～小学校と地域の取り組み～ <労 働> 在留外国人の労働環境について、当事者たちの認識はどのようなものか？ 労働環境を改善するためには、どのような社会づくりが必要か？ <ジェンダー>女性がキャリア形成しやすく、男性が家庭参加しやすい社会にするためには？ <暮 ら し> 在留外国人への望ましい生活サポートのあり方とは？ ～地域、NPO、市民団体(ボランティア団体)の取り組みから問題点と解決策を考える～ <メディア> メディア(新聞・ニュース)の偏向報道が及ぼす影響について ～日韓における具体例と弊害～
参 加 者	日本青年24名、韓国青年26名
スケジュール	9:00-9:30 オリエンテーション 9:30-12:00 討論会 第1部 12:00-13:00 昼食 13:00-14:50 討論会 第2部 15:00-15:40 成果発表

分科会の概要

テ ー マ	教育
参 加 者	日本青年6名、韓国青年6名
トピッ ク	在留外国人児童に対する教育について ～小学校と地域の取り組み～

成 果

1. 韓国での現状

韓国では在留外国人児童へのいじめが問題となっている。その理由として、外見の違い、言語力の差、両親のサポート不足などがあげられる。外見を理由に、在留外国人児童が矢を投げつけられ、失明したという事件もあった。また、日本より学歴を重視する傾向にある韓国では、親の教育的サポートが必須であり、そのサポートの欠如によって、子どもへのいじめの原因になることがわかった。

韓国特有の問題として、脱北者の子どもへの教育についての発言もみられた。脱北者の自宅に子どものための教材を届けてサポートする機関もあり、その教育を受けた後、中学校や高校に入学することを目標に実施されている。しかし、学校に入学できたからといって、それまで国内で教育を受けた子どもたちの学習レベルについていくことは難しく、なじめないことが問題点としてあげられた。

在留外国人児童を取り巻く問題点を解決するために、月に一回程度、外国の食事が提供される「世界給食の日」や、子育て番組では多文化家族を多く出演させる動きなど、食べ物やメディアを通して、知ってもらうことから始める動きがある。また、児童ではないが、大学入試の特別枠として多文化家庭枠を設け、外国にルーツを持つ子どもたちが高等教育を受けやすい環境作りへの取り組みもある。

2. 日本での現状

日本では、全国の公立学校に在留外国人児童が少人数ずつ散らばっていて、地域によって教育の差がみられる。それに加え、カリキュラム外での教育となるため、ほとんどの学校では自治体単位のボランティアでまかなうしかないのが現状である。

日本語指導の必要な児童が増えたことに伴い、外国人が集住する地域の学校の多くは、教員を配置し、「国際教室」や、「日本語教室」を開設して指導をしているが、必ずしも日本語学習についての専門知識を持った教師が配置されているわけではないため、児童が専門的な指導を受けることは難しい。

学校単位では、日本人児童と在留外国人児童との共生学校の実現を目標にして、学校運営を行っている事例もある。しかし、中央政府レベルで在留外国人児童へのサポートがなされているわけではないのが現状である。

3. 上記現状を踏まえた上での意見交換の内容

両国の共通点として、他の場所からの民族を受け入れがたい傾向にあるという意見が出た。また、日韓共通の問題点として、在留外国人児童が学校になじめないということがあげられた。日本人や韓国人の児童に比べて言葉の不完全さがあったり、日本や韓国特有の教育事情についての知識が不足していたりと原因は様々などところにあるが、これは両国の大きな課題となっているという意見が出た。

以上の課題を解消する方法として、時間感覚や職員室の出入りの仕方から指導し、学校生活に慣れさせる取り組み（日本）や、二か国語話せるスタッフが教師と児童の間に入り、授業の内容が全く分からない児童を出さない取り組み（韓国）などが行われていることを追加で共有し合った。

また、多文化共生に関する両国の認識、特有の教育問題、実際に行われている政策などについて意見を交換し合い、それらを踏まえながら両国が実行し得る解決策を考えた。今回出された解決策は、在留外国人児童の親に、子どもの学級や学校で一日先生をしてもらうというものだ。授業の内容としては、母国のあいさつや食べ物など、簡単な母国紹介をしてもらいたいと考えた。この取り組みによって期待される効果は、児童たちの視野を広げ、自分の国だけでなく他国にも興味を持つきっかけになることや、外国や少数への偏見を持たない児童を育てることができるということがある。

外国人児童への支援制度についてもいくつかの案が出た。例えば、学業を途中放棄した子どものための専門教育の提供である。前述したように、授業についていけなかったり、学校に慣れることができなかったりして、学業を途中で放棄してしまう在留外国人児童は多い。そのような子どもたちのために、就職に役立つような医療や料理などの専門知識を提供できる学校を作ることで、たとえ途中で学業をあきらめてしまっても、そこから新たな道を開けるような選択肢を提供できる環境を整えておく必要があるという結論に至った。

4. 発表の内容

全体発表では、日韓両国の現状を踏まえて、解決策をまとめて発表した。具体的には、大きな解決策として、「周囲の認識の改善」と、「外国人児童の支援制度」があげられた。特に、「周囲の認識の改善」では、

1. 外国人の親の一日授業
2. NGOなど、外部の機関の専門講師の授業
3. 自らの出身地紹介
4. CM、メディアなどでの多文化家庭の露出
5. 個人的な取り組み→知識の提供・認識改善

というような内容があげられ、それらを日本語と韓国語で模造紙に書き、日韓各一人ずつが模造紙をもとにして成果発表を行った。

教育グループ感想

今回私たちのグループでは「教育」をテーマに、グローバル化が進む日韓両国で、在留外国人の子どもを対象にした教育は、どのようなものがあるかを中心にディスカッションを行った。なお、ディスカッションを有意義なものにするため、自己研修期間中にはテーマに関する本を読み、内容を班全員で共有をした。

テーマである教育に沿ってディスカッションを進めていこうと考えていたが、今回の大テーマである多文化共生についての認識が日韓で大きく異なっていたため、議論をする上での対象や内容への共通理解がなかった。日本での多文化共生は、お互いのバックグラウンドの違いを認めながら共に生きていくことを指すが、韓国では、多文化共生は多文化家族という言葉で表され、両親のどちらか、又は両親共に外国にルーツを持つ家庭のことを指すという。同じ言葉でも、言葉の意味が全く違うことは興味深かった。

認識の共有と事前学習の成果の共有をした後には、問題点と解決策について話し合った。問題点として共通していたのは、在留外国人にあまり良い印象を抱いていないことだった。そこで、在留外国人を取り囲むマジョリティの認識の改善のために、NGOや外部機関による専門講師授業を行うこと、自分の出身地について紹介してもらうこと、メディアを通じて多文化家庭を露出することなどを解決策として挙げ、まとめた。その他にも、外国人児童への支援制度として、福祉制度の制限を撤廃するという案や、学業途中放棄の児童のための専門教育や二重言語教育を行うなどといった解決策もあげられた。

日本も韓国も外国人の受け入れに消極的だということは同じだが、韓国は多文化家族のメディア露出が日本よりも多いこと、入試で特別枠が既に存在することなどから、多文化家族への関心が日本より高いことがわかった。それにより、日本が今後どのような取り組みをするべきか、それが明確になったディスカッションであった。また、脱北者やその子どもたちへの教育制度についての韓国ならではの課題が知ることができたこと、そしてそれに対して韓国人がどう感じているか、率直な意見を聞くことができ、充実したディスカッションになった。

分科会の概要

テーマ	労働
参加者	日本青年4名、韓国青年4名
トピック	在留外国人の労働環境について、当事者たちの認識はどのようなものか？ 労働環境を改善するためには、どのような社会づくりが必要か？

成 果

1. 韓国での現状

韓国には、日本でいう「技能実習生」という枠組みがなく、自国で労働する外国人は全て「外国人労働者」と呼ばれている。しかし、日本のような「技能実習生」という枠組みはなくとも、就労ビザには様々な種類があり、日本と似通った制度も存在する。

韓国は労働者の中で、外国人労働者の占める割合が日本よりも高く、多くの外国人が働いている。そして外国人労働者が多く働く3D業種（dirty, dangerous, difficult）の労働環境について問題視されている。3D業種の基準は危険性があること、ケガの可能性があること、給料が低いことなどである。工場や農業、産業廃棄物処理、高層作業の仕事があげられる。

また、韓国の最低賃金は国全体で時給830円であるが、その賃金以下で働く外国人労働者も存在する。

2. 日本での現状

「技能実習生」は、技術・技能の習得のために日本に来て働く外国人労働者を指すが、実情は人が足りていない工場などで単純作業をさせている会社も存在している。

また、韓国で言う3D業種は日本では3K業種（危険、汚い、きつい）と表現されている。その基準の定義はないが、体力面だけでなく精神面での意味合いも含み、看護や介護の職場でも使われる表現である。労働環境の問題点としては、契約書がない、あるいは守られないことや、ビザの更新を理由にした恐喝の大きく2つがあげられた。

外国人労働者の労働問題への対策として、「外国人労働者センター」等の機関も存在するが、その情報入手が困難であることなどの問題がある。そういった機関は寄付金で成り立っていることが多く、国や会社が対策をするべきであるとの議論に至った。

他にも、国が制作している「やさしい日本語」や、ある日本企業による日本文化交流会の開催とお祈り部屋の設置などの対策を例に出し、外国人労働者の労働環境改善の対策についても意見を出した。

3. 上記現状を踏まえた上での意見交換の内容

両国の外国人労働者の労働環境について現状を伝え合い、違いと共通点を認識した。

また、具体的な数字や実例を用いてディスカッションを行い、両国の比較を行った。比較からは、両国の「外国人労働者」に対する定義に相違があったことや、異なる労働制度が存在することなど、現状の報告からは得られなかった新たな発見ができた。

さらに、自分たちが今から出来る解決策を考え、当事者意識を持って取り組んだ。

4. 発表の内容

成果発表では、ディスカッションを通じて共有した両国の現状を踏まえ、私たち青年だからこそできる解決策を中心に提案した。

解決策をわかりやすく説明するために、外国人労働者における問題点である「言語」「賃金」「労働環境」の3つを先に紹介した。

そして、そこから以下の内容の解決策を提示した。

1. 様々な情報に接しやすくするためのサイト運営
2. キャンペーンや祭りなど多様なイベントを通じた交流の場
3. マニュアル作成と伝達
4. 労働契約書の第三者チェックの実現

これらを模造紙に日本語と韓国語でまとめ、イラストも入れたポスターを使って発表を行った。

労働グループ感想

私たちは今回「労働」をテーマに、日韓両国で増加し続けている外国人労働者たちが抱える問題点など、両国それぞれの現状を共有し、そのための改善策を中心にディスカッションを行った。このディスカッションのため自主研修期間中には、外国人労働者に対する基礎知識から、昨今日本で問題にもなっている「技能実習生」の劣悪な労働環境に至るまで、日本青年側でそれぞれ資料を集め、共有し合いながら準備を行った。

ディスカッションでは、はじめに青年同士で両国の現状を共有し合った。私たち日本側は「技能実習生」に焦点を当てて日本の現状を伝えた。しかし、韓国には「技能実習生」というものが存在せず、外国人労働者が全て同じくくりで考えられていたため、「外国人労働者」という同じ言葉でも国によって意味が異なっていることに驚きを感じた。また、両国とも自国の働き手減少問題に関しては、ビザ緩和などの制度を通して積極的に行っているものの、実際に働いている外国人労働者への支援はほとんどなく、あったとしても彼らには知られていないため、無意味なものと化しているように感じた。

次に、両国の現状の共有から挙げてきた問題を改善していくために、私たち青年にできることについて話し合った。日韓両国「外国人労働者」の言葉の定義は違っていても、彼らの抱える問題点は相似していたため、私たちはその問題点を「言語」・「賃金」・「労働環境」という3つにまとめ、それらに対する解決策を挙げた。解決策は、「外国人労働者たちが情報に触れやすくするためのサイト運営」、「外国人労働者が抱える問題を知ってもらうためのキャンペーンや祭りなど多様なイベントを通じた交流の場」、「契約時のマニュアル作成と伝達」、「労働契約書の第三者チェックの実現」の4つを提案した。

最後にこのディスカッションを通して、外国人労働者への支援やきちんとした制度の整備は、NPO法人やボランティアが行う活動には限りがあるため、政府が先頭に立ってやっていくからこそ意味のあるものだと感じた。そして、普段はなかなか身近に感じることもない外国人労働者の労働問題について、韓国の現状はもちろん、日本の現状についても改めて学び直し、関心を持つ大変良い機会であった。今回のディスカッションで知ったこと、学んだことを念頭に置きながら、自分が実際に取り組めることについても考えていきたい。

分科会の概要

テーマ	ジェンダー
参加者	日本青年4名、韓国青年6名
トピック	女性がキャリア形成しやすく、男性が家庭参加しやすい社会にするためには？

成 果

1. 韓国での現状

韓国では、2016年の「江南駅女性殺害事件」を契機に、フェミニズム運動が活発化している。特に20代から30代の女性を中心に、結婚・出産によるキャリアの断絶や職場でのセクハラ問題を提起し、男女の権利の平等化を訴えている。男性が「家長」として経済的に家を支え、女性は夢やキャリアをあきらめて家庭に入るという固定観念が、現在の男女イメージに強く影響を及ぼしているという。実際に、出産後も仕事を続ける女性は母性愛が足りないと見られ、退職に追い込まれている。

最近では運動が激化し、男性側から逆差別だという声上がるようになった。男性は女性と比較して仕事以外の選択肢が少なく、育児制度も充実していないため、積極的な家庭参加は困難である。女性の負担軽減を目的とした公共のケアサービスや国・企業によるサポートはあるが、それも充実しているとは言えず、いずれも問題解決に至っていない。

また、表現の見直しも行われている。男性が家事を行うことを「手伝う」ではなく「共同参加」にし、性を意識させる「女性らしい」「男性らしい」といった言葉は使用しないなど、フェミニズム運動の影響で言葉の表現に対し過敏になっている。

以上のことから、現在、韓国は「女性と男性の人権が平等になる過渡期である」と言われている。

2. 日本での現状

日本では、1980年代後半から現在にかけて、非正規雇用が増加している。これは、人口減少による人手不足から労働力を確保するため、人件費のかからない非正規雇用の枠を企業側が拡大したことが主な原因だ。非正規雇用として働く側も、正社員よりも個人や家族の生活を優先できるように配慮された働き方が実現できるため、非正規雇用の増加を助長している。

また、出産や育児をする女性、育児をする男性に対して、育児介護休業法等の法制度からサポートをしようとしているものの、実際のところは職場の理解が得られず、仕事と育児を両立できないという理由から、離職してしまう女性や育児休業をなかなか取得できない男性が多い。

さらに、近年では育児をしながら自分の親あるいは配偶者の親の介護をしなければならなくなり、仕事を辞めざるを得ない女性が急増している。

一方で、近頃のドラマでは、職場での女性へのパワハラやセクハラに触れた作品や、働く女性が主人公の作品、主夫や男性の育児休暇を扱う作品などが増えてきている。時代とともに変化していく女性の働き方や家族のかたち、男性の家庭参加を映像作品が反映している。

3. 上記現状を踏まえた上での意見交換の内容

日本では、様々な企業や社会の政策として、女性の社会進出やキャリアサポートなどの目標を掲げているが、当事者である女性がそれらを活用、又は自らが自分を、男性には敵わない、男性のサポートに徹すると考えている女性が多い。一方で韓国では、江南駅女性殺人事件から、女性であることから弱者とみられる社会に対して様々な運動を通じて異議を唱え、日本よりも敏感になっている。

しかし、日本ではドラマやメディアを通じて現在の社会に訴えかけている作品が流行となる中、韓国では運動などが活発なのに比べて、社会が後押しできていない部分が見られるという指摘が出た。

日韓共通で改めるべきだという意見が出たのは、言葉の表現の面だ。「男らしい」「女らしい」「女子力」など当たり前に使ってきた表現でも相手を傷つけることがあるので、慎重になるべきという意見が出た。

また、「男性がもっと女性が社会進出できるように家事を手伝うべきだ」ともよく言われているが、この表現自体が家事は女性がやるものという固定観念に囚われていることにも気がつき、家事に参加するなどの表現に改めるべきだという意見も出た。

ディスカッション全体を通じて、女性弱者や男女差別に不快感を持っている私たち自身も、無意識にそれらを行っていたり、それらを促す表現を使っていたりしたので改めて慎重になるべきだという結論に至った。

4. 発表の内容

討論の内容を踏まえ、日韓両国で社会的な性差別が生じているという共通の問題に対する解決策を具体的に発表した。

解決策は、「メディアが行うべきこと」、「自分たちが行うべきこと」、「政府や社会団体が行うべきこと」の3つの項目に分けて発表した。詳細は下記の通りである。

1. メディアが行うべきこと

『逃げるは恥だが役に立つ』『わたし、定時で帰ります』などの日本のドラマのように、女性の働き方や日本の職場環境について触れた媒体を発信したり、影響力のある人物の発言を取り上げる。

2. 自分たちが行うべきこと

今まで当たり前に使ってきた言葉の表現を改め、使わないようにする。

3. 政府や社会団体が行うべきこと

介護や子育てなどのケアサービスをより充実させ、利用しやすい環境づくりを行う。また、児童センターのような子育てに貢献する施設を提供する。

以上を模造紙にまとめ、日本語、韓国語で発表を行った。

ジェンダーグループ感想

今日の日本では賃金、管理職、政治において、男女の雇用に大きな差が存在する。私たちの班ではジェンダーをテーマとして、女性がキャリア形成しやすく、男性が家庭参加しやすい社会について、韓国青年とディスカッションを行った。

ディスカッションの前半に、日韓両国の男女の働き方と育児休暇に関する情報を青年同士で共有し合った。ここでは、日本と韓国の社会でキャリア形成と子育てにおいて男女の差があることがわかった。特に韓国では、女性が子どもを家族や施設に預けることに対して、母性愛に欠ける行為と見られるため、出産後に仕事を続けることが困難であることを知り、子育てをする女性のあり方が一元的であることは、非常に深刻な問題であると感じた。

ディスカッションの後半では、男性の家庭での役割について意見交換を行った。日本、韓国ともに「男性＝仕事」、「女性＝家庭」という固定観念が強く根付いていることが分かった。近年では、男性の家庭参加や育児休暇取得などによって、従来の考え方が変化し始めている一方で、古い風土が残っているためか、休暇の利用者は少数であるという問題もあった。ディスカッション終盤では、「男性は女性の家事を“手伝う”という考え方を根本から見直すべきである」という意見から、「家事は共同参加が当たり前になる必要がある」という結論に至った。

初めて外国人とディスカッションを行ったが、日本人同士で討論する時と比べ、自分が日本語をよりわかりやすく話すように心がけていたことに気がついた。日頃、日本人同士で話す際は、日本文化を共有しているため、会話の中で詳しく話さずとも、理解し合うことが可能であることが多かった。しかし、文化や習慣の異なる韓国青年とは、普段の話し方では上手く伝わらなかったため、発言する際には自分の気持ちを一つひとつわかりやすい言葉にするよう努力した。

「多文化共生」には、人種・民族・国籍だけでなく、性別や宗教など異なるバックグラウンドを持つ人が、お互いに自分の考えや思いをきちんと言葉にすることが重要であるということはこのディスカッションを通じて感じた。文化や国籍だけでなく、男性と女性が1つの考え方に縛られず、お互いに生きやすい社会を形成することも「多文化共生」へと繋がるということを学ぶことができたと考えている。

分科会の概要

テーマ	暮らし
参加者	日本青年5名、韓国青年5名
トピック	在留外国人への望ましい生活サポートのあり方とは？ ～地域、NPO、市民団体（ボランティア団体）の取り組みから問題点と解決策を考える～

成 果

1. 韓国での現状

韓国では、在留外国人の政策を知らない人が多い。地方自治体ごとに外国人向けのホームページを管理しているため、ホームページごとに内容の差がある。

光州では、外国人向けの労働センターがあり、約20件のサポートがある。外国人専門の相談員もいるが、ホームページは韓国語のみである。ソウルにも労働センターがあり、サポート件数も多く、観光より労働の支援が多い。

健康保険には、外国人差別があると言われていて、韓国人は家族で保険に加入すると安くなるが、外国人は20歳を過ぎると個人として見られ高くなる。例えば、韓国人は1人2万ウォンで済む費用が、外国人は1人11万ウォンかかり、韓国人より在留外国人の負担が重いことが問題視されている。

在留外国人の選挙権はソウルでは認められていないが、地方では認められているところがある。それは永住権を取得し、韓国に3年以上住んでいる人に与えられる。

国語の教師は人気があるが、外国人のための教師（韓国語教師）は給料が少ないため人気が低い。

2. 日本での現状

都市部の現状について、新宿や横浜など日本の中でも都市といわれる場所は、制度が充実しており認知度が高く、また一方で、都市圏にある八王子市は、外国人が多く支援の数も増えている。例えば、暮らしの相談スペースや日本語教育の支援もあるが、いずれも認知度が低い。

他方で、地方の現状については、福島県では、外国人向けの5か国語に対応したホームページはあるが、分かりにくく周知されていない。山梨県では、ポルトガル語・韓国語・スペイン語・中国語・英語話者向けの「暮らしのハンドブック」というものがあるが、難しい日本語にふりがながついていてだけである。静岡県には、「しごとのための日本語」というものがある。青森県では外国人が少ないため、他の地方と比べて制度が充実していない。しかし、弘前市で言語専門の教授のもと、在留外国人向けの「やさしい日本語」が開発され、それを使った技能実習生向けの避難訓練が行われている。山口県のホームページは韓国語・中国語・タガログ語・英語に対応しており、外国人専門の相談員がいる。また災害時にどうしたらよいか教える講座などがあるが、宣伝不足である。

3. 上記現状を踏まえた上での意見交換の内容

日韓両国で共通して、「在留外国人向けのサポートや制度に、都市と地方で差がある」ということと、「在留外国人向けのサポートや制度に対する情報提供が不足しており、認知度が低い」ということの2つが問題点であった。これらに対し、日韓共通で通用する解決策を具体的に出し合った。

解決策を考える際に、在留外国人へのサポートや制度は統一性を持つべきだ、という意見が最初に出た。そうすることで、地方と都市の在留外国人を取り巻く環境の格差が小さくなり、情報の周知もやすくなるからである。

都市と地方の格差をなくすための解決策としては、言語教室で言語を教える人材を地方にも配置することや、全国の市役所などの公的機関に、言語・生活・支援について分野ごとに相談できる相談員を配置することがあげられた。

一方で、サポートや制度の情報提供不足や認知度が低いことへの解決策としては、多言語表記の自治体のリンクを集めたホームページや、防災・生活・医療などについての情報が得られる多言語対応のアプリケーションを作成し、在留外国人に入国する時点で紹介するのはどうか、という意見があがった。また、年金や保険などの複雑な制度の仕組みなどが、在留外国人でもわかるような全国共通のガイドブックを配布するという案も出た。

4. 発表の内容

成果発表では、在留外国人を取り巻く環境における日韓共通の問題点をあげ、それらの解決策についてまとめ、発表を行った。

問題点に対する解決策については、先に全国レベルでサポートや制度を統一させるべきだという意見を紹介してから、「サポート施設」と「情報提供」の2つの項目に分けて解決策を紹介した。

「サポート施設」の項目では、都市だけでなく地方にも言語教室を設け、相談員を配置すること、「情報提供」の項目では、在留外国人向けのホームページやアプリケーション、ガイドブックを作成することについて発表した。

暮らしグループ感想

今回私たちのグループでは、在留外国人の「暮らし」をテーマに掲げ、「在留外国人への望ましい生活サポートのあり方とは何か」を中心に、日本と韓国の国内事情を踏まえながらディスカッションを行った。

初めに、事前研修・自己研修期間中に調べてきた内容をもとに、日本青年から在留外国人に対する日本のサポートの現状を報告した。その後、韓国青年から韓国での現状報告を聞いた。互いの国の現状を知り、日本と韓国での在留外国人が置かれている状況は、「対策が行われているものの、課題点を抱えている」という点で似ている部分が多いと感じた。

次に、両国が抱える問題点とその解決策について議論した。両国共通の問題点として、「都市と地方の格差が大きい」という点と、「在留外国人へのサポートの認知度が低く、支援を必要としている人達に情報が行き届いていない」という2点があがった。

これらの問題点を踏まえ、解決策について話し合った。話し合う中で、都市と地方での施設や制度を統一することによって、地域格差を減らすことができるのではないかという案が出てきたため、私たちの班では、全国での統一性を重視しながら解決策を考えた。

地域格差を埋めるための解決策として、「地方にも言語・生活指導のための相談員を設置する」、「防災・生活・医療に関する情報が入手できる多言語のアプリケーションを作成する」など多くの案があがった。中でも私が強く賛同した案は、「国全体で統一された緊急事態の時の対応が簡単にわかるガイドブックを発行する」というものだ。その理由は、インターネットの普及が進んでいる中でも、全員がネットを使いこなすことができるわけではないからだ。紙媒体のガイドブックを持っていることで、ネットがつかない環境でも、避難方法などを確認することができるのでとても良い案だと思った。

全体を通して、私たちのグループでは、自分たちの身近な取り組みについて話したり、事前に調べた情報を共有したりと、日韓のグループ全員が積極的に議論に参加し、具体的な解決策を考えることができたため、充実したディスカッションとなった。また、このディスカッションから現状を深く知ることができた。今後は、在留外国人が安心して暮らしを送ることができるよう、できることからサポートをしてあげたいと考えている。

分科会の概要

テーマ	メディア
参加者	日本青年5名、韓国青年5名
トピック	メディア（新聞・ニュース）の偏向報道が及ぼす影響について ～日韓における具体例と弊害～

成 果

1. 韓国での現状

韓国では、報道環境において、報道の真偽判断が難しいことが問題になっている。200以上もあるテレビチャンネルや新聞社ごとに報道の偏りがあるため、複数をチェックし左右両方の報道内容で事実を確認するが多い。若者はネットニュースを見る傾向があり、不確かな情報に惑わされやすいため、フェイクニュースを見極めなければならない。家族や友人と意見交換をすることで、報道の偏りに気づいたり、自分の考えをまとめたりする。

韓国では単に事実だけを報道することも多いが、報道を外交と結びつける場合もある。例えば、先の不買運動に関する報道では、問題に関心のない日本人に興味を持ってもらうことや、半強制的に不買を促すことなどに目的がある場合も少なくない。

2. 日本での現状

日本の報道環境について、テレビでは視聴率が重要なため、高視聴率を狙った作為的な報道のされ方が問題となっている。ネットニュースでも読者の興味を引くために、過激なタイトルがつけられることがある。また、新聞社に左右の偏りが見受けられる。

日本では、政治に興味・関心がない青年が多いことが問題である。自ら情報を集め分析し、自分の考えを形成している人が少ない。

3. 上記現状を踏まえた上での意見交換の内容

両国で偏向報道があり、事件に関して認識の違いがあることがわかった上で、どのように多文化共生をしていくのか話し合った。円滑に話し合うために、不買運動についての報道を例にあげながら意見交換を行ったが、日韓の報道内容について確認しあったところ、例えば韓国で報道されている事柄が、日本では報道されていないということがあり、同じ事件について取り上げても、日韓で報道の仕方や内容が大きく異なっていることが分かった。

また、日本では政治に無関心な若者が多いという問題が浮き彫りになっている意見が出た。一方で韓国側では、膨大な数のメディアと様々な意見が身の回りに溢れ、情報の選別が困難であるという意見が出た。

最後に、両国の青年が今後より活発に交流し、政治について話す機会・場を設けるべきだという意見にまとまった。

4. 発表の内容

まず、グループ内で共有した日韓のメディア環境と両国ともに偏向報道があるという現状や、我々青年が直面する問題について提示した。

次に、将来私たちが偏向報道とどのように向き合うべきか、ディスカッションの内容をもとに紹介した。具体的には、様々な観点のニュースを自ら主体的に受け取り、客観的・批判的に見ることでそれらの真偽を見極める必要があることや、政治に興味を持って学ぼうとする姿勢と行動が大切であることを紹介した。

メディアグループ感想

私たちのグループは、「メディア（新聞・ニュース）の偏向報道が及ぼす影響について」をディスカッションのテーマとして取り上げた。日韓関係が難しくなっている現在、両国の人々はメディアから情報を得ている。しかし、様々な問題を、日韓同じように、必ずしも正しく客観的に報道されているとは限らない。さらに、膨大な情報の中から信頼できるものを選別することは容易ではないため、情報に惑わされ、そこから互いの国への誤解が生まれることもある。私たちはディスカッションを始める前に、マスメディアでの報道を中心として、竹島問題と日本製品不買運動の事例に具体案を絞ることを話し合っただけで決めた。そして各々がそれらの詳しい内容や、報道のされ方を調べ、随時同じグループの団員と議論や情報共有を経て、討論会に臨んだ。

まず私たちは、「日・韓のメディアの現状」について話し合った。両国ともに、公共放送や数多くのケーブル放送、新聞、雑誌など様々な方向性を持つメディアがある。またそれらが偏った報道を行っている現状があることについて、両国ともに確認できた。その次に、では本当の事実は何なのか、その事実をどの観点から見て考えなければならないのか、という疑問のもとで、「私たちの考える偏向報道は何か」について議論した。歴史的背景を含む過激な発言や、感情に基づいた文章、読む人や相手国を扇動するようなものがあげられた。様々な報道を比較し見極め、受け入れようとしても、豊富な知識がなければ、真実の把握が困難になるだろうと容易に想像がついた。まとめとして、「私たち自身が将来、偏向報道にどうやって向き合うべきなのか」について議論した。そこではまず、フェイクニュースと正確なニュースを批判的かつ客観的に見て、いろいろな観点の記事を自分で主体的に受け取ること、今よりも更に政治に興味を持ち学んでゆくこと、そして、日本人同士・韓国人同士だけでなく、両国の青年が活発に交流し相互理解を深めることが大切だと思った。

今回のディスカッションは、自分達と同じ世代の韓国青年たちが、どのように感じて考えているのかを知ることができた貴重な機会だった。相手の意見を聞いたことで浮かび上がった自国や自分自身の問題についても考えることができ、これからも積極的に学びを深めようという気持ちも高まった。多文化共生の一歩としてのメディアリテラシーが、いかに大切であるかということも再確認できたと考えている。